

幼年部会

柿田 比佐子

幼稚園の現場から

幼稚園をめぐる情勢の変化はさまざま。待機児解消政策として既存の幼稚園・保育園を「こども園化」するという動きを国が示して以来、どこの自治体も一気に呵成にこの動きにのっている。

保育園の制度は長い運動の歴史の積み重ねの中で一定の居場所を得たことがわかっていただけに、働く母親としてその恩恵を受けたその制度がいきなり破壊されたのは悲しいし、「幼稚園」出身の教師という立場では、公立幼稚園がどんな姿を消していくことに憤りを覚える。幼稚園というものは、今後は私立でしか存在しなくなるのではないだろうかと思える位である。

同じ「子ども」を対象としていても、「厚生省」「文部省」という違う畑の中で「保育園」「幼稚園」はそれぞれが長

い歴史を重ねてきた。それぞれの土壌の中で作り出された文化の違いは、実際に統合するとなかなか簡単には乗り越えられないものがあるのは当然である。「空き部屋があるなら使いましょう」「同じ地域にある公立の保育園と幼稚園は統合しましょう」という経済効率優先の安易な政策は、器を作ってあと現場任せというかなり乱暴なものになっている。予算の裏付けは保育課なのか教育委員会なのか、実際の保育では幼稚園・保育園どちらのスタイルで保育が進められるのかなど、統合に必要なきめ細かなビジョンなしに、僅かな時間で制度が強行されることが多く、現場の混乱は甚だしいものがある。

幼稚園の現場と保育園の現場の大きな

違いのひとつは、「担任制度」ではないかと私は思っている。幼稚園出身の保育者は、なんでも担任一人で責任を背負い込むことが当たり前になっているが、こども園という制度の中に入ってもそれを変えることができないのではないだろうか。しかし、長時間、保育を回していくためにはどうしても複数で子どもを見ていかざるを得ないし、朝夕はパイトで乗り切ることもある。様々な職種が関わりながら保育を展開していく保育園の制度から学ぶことが多いのではないかと思う。どんなに優れた力をもっていて、保育者が疲弊してはよい保育を展開することはできないからだ。

保護者から見れば、ニーズもないのに施策としていきなり保育園化されて、長時間保育はありがたいが、保育内容にはもうひとつ満足できないという気持ちがあるようである。幼稚園・保育園が相互に歩み寄る姿勢をもつても実際に理解をもてるまではまだまだ時間はかかるだろう。過渡期の現場の混乱がどう子どもたちに影響を与えるのだろうか…。

(渋谷・西原幼)